

---

# 天使降臨-英雄から伝説へ-

nomusun

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使降臨 - 英雄から伝説へ -

### 【Nコード】

N9554I

### 【作者名】

nomusun

### 【あらすじ】

失意の果て、自分の家から家出をし、八神町へ引越してきた闘留。その町でおこる様々な出来事。様々な人との出会い。そしてそこから発展する戦い。戦いに何の意味が、戦いの果てに待つものとは。これは力無き少年、闘留が伝説の英雄になるまでの物語。

## プロローグ

### プロローグ

「やあ〜」

神姫町の一角にある洋風の大きな屋敷から、元気な男の子の声が聞こえてくる。洋式の屋敷の庭には芝生が敷かれており、そこには声を出していた男の子以外に、身長の高い男の人と男の子より少し年下が下に見られる女の子がいた。男の子は髪が黒く短めのストリートヘアで、目も黒く青のジャージを着ている。手には自分の身長とあまり変わらないくらいの木刀を持っており、その木刀をこれほどかというまでに高々と上げていた。男の子は声を上げて勢いよく自分の正面にいる自分の三倍くらいはある男性へと向かっていく。しかし、男の子の木刀は男性の木刀に簡単に弾かれて、男の子は勢いが止まらずそのまま芝生の上に尻餅をつく。男の子は尻餅をついたまま男性を見上げて文句を言うように話始めた。

「酷いよお父さん。受けるだけって言ったのに」

男の子の名前は風舞鬪留。風舞家の長男。年齢八歳。

そんな鬪留に真面目に答える男性。

「弾かれないような打ち方をしてこればいいだろ。文句はまともに打てるようになってからにしろ」

男性の名前は風舞志朗。風舞家の当主で、年齢二十九歳。鬪留と同じ髪型で、白いジャージを着ている。

さらに鬪留の横から馬鹿にするような女の子の声が聞こえてくる。

「お兄ちゃん弱いからねえ〜。剣術向いてないんじゃないの?」

女の子の名前は風舞春香。鬪留の妹で二歳年下だが、剣の腕は鬪留よりも上。年齢六歳。赤のジャージを着ていて、長い髪をまとめ、後ろで結んである。

「うるせー！これから強くなるんだよ」

怒鳴りながら勢いよく立ち上がり、もう一度木刀を持ち直し父親に特攻する。

・・・平凡な毎日。何も変わることがなく進んでいく時間だと信じていた毎日。しかし、そんな毎日も終わりを告げる日がきた。

それから二年経った頃、風舞家の大きな屋敷の中にある何処かの部屋に、ベットに寝たっきりの男と、それに縋り付き泣きじゃくる男の子の姿があった。

「うっ・・・うっ、お父さん、死んじゃ、やだよ・・・ひっく。起きてよ」。僕、もっと強くなるから。誰にも負けないくらいに、強くなるから・・・ひっく。だから、目を覚ましてよ」

しかしベットに寝ている男性は、男の子の問いには答えてくれない。その日、闘留は誓った。誰にも負けないほど強くなると。

どんな人も守れるくらい強くなると。誰かに約束したわけでない約束を、闘留は誓った。そしてその日から、闘留の人生と性格は変わり始めてしまった。

## 第一章

『光の羽が舞うとき災厄は消える』

小さい頃に、そんな言葉を聞いたことがある。その言葉の意味を理解することは出来なかった。今もその言葉の意味を理解してはいない。だがその言葉を発した人は、続けてこんなことを言った。

「私の次はお前だ。正しい心を持って。そうすればいずれお前にもこれを使える時がくる。」

そういつて見せたのは首飾り。水色で、ビー玉くらいの大きさの宝石がついていた。

「『靈気と魔法は、一つになれる』お前にはその力があるから」

俺にそんな力は無い。妹にも勝てない俺に、何ができるっていうんだ。

.....

(あれは、小さい頃の夢?)

目を覚ますと見知らぬ天井。そう、ここは自分の以前住んでいた部屋ではない。昨日引越して来たばかりの新しいマンション。当然家族全員での引越ではない。正確には引越ではなく、俺は家を出してきた。家のほんの一部の人以外には黙って。その一部とは妹と俺のお付きのメイドの二人。そう、屋敷の中で信用できると言ったら、この二人以外には誰もいなかった。

(新しい生活を始めようとしてるのに、なんで一目目からこんな夢見るんだよ)

俺が家出してきたのは、家に住み着いた口煩い伯母が嫌になり出て来た。その伯母は口煩いだけでなく、妹との交流も遮られてしまいい、俺のことをいつも虚仮威していた。何をやっても駄目な奴。剣術も出来ない、頭も悪い、その基準はいつも妹だった。

妹は小さい頃からその才能を發揮し、親やその親戚からも一目置

かれていた。俺が小さい頃からやってきた剣術も、あつという間に抜かされてしまった。

俺は、お父さんが死んでから必死に剣術の修行をした。何か目標を目指す訳でもなく、只がむしやらに強くなるうとした。全部守れる力が欲しい。あの時誓った約束を守るために……。しかし、俺はいつの間にか強くなることを諦め、只何一つ変わらない生活をおくってきた。

(……って、俺は誰に言ってるんだよ。こんなめんどくせえ解説) 今日はこの町に来ての初日。土地勘を知っておくためにも外をブラつくことにした。テーブルの上に置いてある、水色のビー玉くらいの大きさの首飾りを取り、首にかけてから大きくドアを開け町へと出かけた。

## 第一章

### 始まりの鼓動

俺が越して来た町の名前は八神町。俺があらかじめ調べた情報だと、この町に植えられている木の九割が桜の木らしい。それなりに活気のある町で、桜の花が咲き誇る今の季節、この商店街も人込みで溢れている。そう、今俺は商店街にいる。めんどくさいから基本的に人込みを避けたかったのだが、適当にフラフラしていると、いつの間にか人込みの多い商店街まで来ていた。

「ホントにゴミゴミしてんなあ。人口密度高すぎだろ」  
ブツブツ言いながら歩いていると真ん中に大きな噴水がある広場

に出た。広場は噴水を囲むように円上に広がっていて、同じように回りに六本の支柱が噴水の回り規則正しく並べて囲んで立てられていた。

「すげえなあ〜」

思わず声を出してしまうほど立派さだった。

「この町は初めて？」

少女のような幼い声、でも大人のような静かな口調で誰かが話しかけてきた。声がする方を見ると、そこには俺と同じように噴水を見ている水色掛かったロングヘアの少女が立っていた。その髪の長さは腰の下の辺りまで伸びていて、目は何処までも清んでいる黒い瞳をしていた。

「ああ、そうだけど」

俺がそう言うと少女は笑顔でこちらを向き、

「この町の綺麗なところは、噴水だけじゃないよ」と言った。

それだけ言うと少女は振り返り、人込みの中に消えて行った。

「何だったんだ？」

それから数時間、俺は商店街をウロウロ（迷子？）していた。

商店街をやつとの思いで出て家に帰る道中。来る時には塀で気づかなかったが、秋月神社と書いてある看板が立ててあった。

（神社か・・・）

少し気になり行こうとその角を曲がったが、絶句した。角を曲がった先には長い急な坂があった。

（ここを、登るのか）

でもやはり坂を登るえらさよりも、好奇心の方が勝っているため、どうしても足が進んでしまう。

「はあ〜」

出るのはため息だけだった。

やつとのことで坂を登り終わると、俺はまた、絶句した。その先

には赤色の鳥居が立っていたのだが、もう一つ奥に見えるものは、これもまた長い石段だった。もはやため息も出ない。

(こんなにも高い所に建てる必要あったのか?)

しかし、今まで登るのに必死で気がつかなかったが、いつの間にか町の風景は無く、辺りは森で覆われていた。下の方にはしっかりと塀の多い住宅街やらが見えるが、今自分のいる所は明らかにさっき自分がいた所とは別世界だった。

石段を登り終えると、一番最初に目についたのは神社ではなく、自分から左手に見える大きな桜の木だった。その桜は普通よりも大きかった。次に目に付いたのは、散っていく花びらが光り輝いていることだった。その桜の幻想的な美しさに少しの間動くことが出来なかった。感動という言葉が一番合うのだろうが、この時はなぜか懐かしさも感じていた。何故だかわからないが涙が出て来た。見上げていた目線を落とすと、そこには紅白の巫女衣装を身に纏った少女が眠っていた。茶色い髪で、髪は左右の上の辺りをゴムで束ねていた。桜の木の下で寝ている少女は、まるで天使のような寝顔だった。

桜の木の下で、天使の少女(?)前にもこれと同じような場面があったような。

覚えていない。少女がどんな顔で、どんな髪だったかも。しかし、彼女と別れるときに言った、彼女の最後の言葉は覚えている。

『約束だからね』

何の約束かも覚えていないが、その時の少女の声は寂しそうな声ではなかったはずだ。しかし、俺はその約束をまだ果たしていないはずだ。今でも彼女はあの約束を覚えていて、俺がその約束を果たすのを待っていてくれるだろうか。そう思うと、あの少女に言いたいような罪悪感が湧いて来る。

これほど幻想的な風景の場所に身を置いているのに、思い出すのは幼少の頃の嫌な思い出だけ。

「うっ……うっん」

(はっ・・・)

桜の木の下で寝ている少女の寝起きの声に我に帰った。少女がゆつくりと目を開けるのを、少女が目を開ききりこちらに気付くのを、そして驚き勢いよく立ち上がるのを、俺はじっと見つめ続けていた。「あ、あの、お見苦しいところをお見せしました!」

少女の顔が赤くなっているのは一目でわかった。

「いや、こういう場所ならうつかり寝ちまうのしょうがないと思うぞ」

「はい、すいません。・・・それで、この神社に何かようですか?」

「あつ、申し遅れましたが、私の名前は秋月<sup>しづづつれいか</sup>霊霞、この秋月神社で巫女をやっています」

「俺は風舞<sup>ふうま</sup>鬪留。ここに来たのは・・・、気分かな」

すると、彼女は人差し指と親指を顎にあて、考えるそぶりを見せた。少して顎から指を離すと、いきなり質問してきた。

「歩くのが好きなんですか?」

「えっ?」

つい、いきなりの質問だったので、聞き返してしまう。

「いえ、ただ気分での坂を上って来るなんて、余程歩くのが好きな人なのかなって」

「ああ、いや、ここには昨日越して来たばかりで、今日はとりあえず町を回ることにしたんだ」

「そうなんですか・・・。感想はどうですか?」

「人が多いところは余り好きじゃないんだけど、活気があって面白い町だと思ったよ」

「この町は、いいところですよ。それじゃ、わたしは用事があるので、これで失礼します」

そういうと、彼女は会釈をして神社の裏手に消えていった。

神社の長い階段を駆け降りて先ほどの住宅街にでた。相変わらずの塀に囲まれた住宅街。その住宅街の中を自分のマンションに向か

って歩き始めた。

マンシヨンに辿り着き、扉のノブに手をかけ扉を開ける。相変わらぬにもない部屋。全て備え付けの物。備え付けのベットに、備え付けの冷蔵庫。備え付けのクローゼット。それ以外には、明日からお世話になる八神高校の制服があるくらい。とりあえず中に入っ  
て、首飾りを机に置き、ベットに仰向けに倒れ込む、そして大きなため息をついた。

「はあ〜。疲れたなあ〜」

人込みを歩くのは苦手だし、初めての町を歩いたこともあり、その疲れがどつと押し寄せてきた。俺はそのまま目をつむり、いつの間にか深い眠りについていた。

起きたのは朝7時頃。学校には十分間に合う時間だった。

（確かクラス表が張り出されるんだったよな。早いにこしたことはないから、行くとするか）

さっさと制服に着替え、机に置いてある首飾りを取り首にかけ、昨日の夜食べるように、越してくるときに買ってきたパンを頬張り部屋を出た。

「はあ〜」

（何でメロンクリームパンなんて買ったんだろ）

大きなため息をつき少しかじった長細いパンを見て後悔する。実はこういった少し変わった甘さのパンはあまり好きではない。それでもこのパンを選んだのは、あの時だけはこのパンがとても美味しそうに見えたからだ。

「はあ〜」

二回目の大きなため息をつきながら二階から一階に行く階段を下りる。マンシヨンの正面の通りに出ると、自分が下りて来たマンシヨンの階段から、誰かが下りてくる音がした。階段を見て、誰が下りて来ているか確認すると、自分と同じ制服を着ている少女が下りて来た。茶色い短髪の縦ロールの髪型。どこと無く清楚な感じの印

象をつけた。

少女が階段を下りきりこちらに歩き出そうとしたとき、自然と少女と目があつた。

「おはようございます」

「あ、お、おはよう」

いくら同じ学校の生徒でも、男子に普通に挨拶するとは思わなかつたので、少し動揺してしまつた。そんなことも気にせず、少女は続けて話しをしてくる。

「あなた見ない顔ですね。ということは新一年生。確かクラス表は八時に張り出されるんはず。あなた、どうしてこんなに早く登校を？」

「あ、いや、早く目が覚めたんで、なんとなく。・・・そういうあんたも早いじゃないか」

「私はクラス表が張り出される前にやることがあるので、それと私は三年なので、きちんと敬語を使って下さい」

「はあ・・・」

「それではこれで」

そういうと、俺の横を擦り抜け学校の方に向かって歩いてく。そのまま行くと思いきや、数歩歩いて止まつた。

「あつ、あと、購買もよかつたら見に来てくださいね」

「あ、はい」

それだけ言つと、また歩きだして行つた。

(ん〜、なんか、圧倒されたな)

気を取り戻し、自分もまた学校へと足を進めた。

『この先、八神高校前桜並木。血桜公園』

家を出てから七、八分歩いてくると八神高校を表す看板あつた。

(へ〜、近くに公園があるのか。・・・でも、血桜って)

やっぱりこういう町に来ると、珍しい物や名前、色々な人との出会いがあり、結構新鮮な気持ちになれる。

看板を眺めていると、カラカラという音が聞こえてきた。音のする方を見ると、車椅子に乗っている男子と、その車椅子を押している女子がいた。しかも車椅子を押している女子は右手に刀持っていた。

（廃刀令だ。朝の人といい今の人といい、ここの学校には変な奴しかいないのか）

車椅子の二人組を見送った後に続き、俺も八神高校前桜並木に入った。高校前の桜並木の奥には八神高校が見え、その手前に正門と、八神高校を囲む塀が見える。そしてその正門までは、ずっと桜並木が続いていた。しかし、さつき看板に書いてあった公園らしき物は見当たらなかった。とりあえず桜並木の風景を楽しみながら正門まで歩いた。

正門を潜ると、正面玄関の右側に数十人程度だったが学生等が集まっていた。まだ少し早かったので、クラス表は張り出されていないかったが、それでも生徒たちは前に行こうと必死だった。

（はあく、めんどくせえなあく）

人の輪から少し離れた場所で、クラス表が張られるのを待つことにした。ほんの二十分くらい待つ中で、色々な人がいた。女子をナンパする男子。それを追い掛ける女子。本を読みながら歩いている人。人の行き来を見ていると、二十分はあっという間に過ぎた。

「それではクラス表を張り出します。確認がすんだら、生徒たちは速やかに教室に入りなさい」

放送がなり、それと同時にクラス表が張り出された。

「よし、行くか」

遠目からクラスを確認しようとしたら、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あなたのクラスはBですよ。風舞闘留君」

「えっ？」

振り向くと、朝マンションの前にあつた先輩が立っていた。

「あっ、朝の……。B組って本当ですか？」

「自分で確認してきたら？私はこれで失礼するわ」

「はい」

B組のクラス表を見に行く。後ろの方から見ていくと。

「あつた」

確かにあつた。あの人の言ったことは本当だった。

(何であの人わかつたんだ?)

疑問に思いつつ、自分の教室に向かう。教室は玄関を入って正面にある階段を上り、三階まで上ったところのすぐ右手に見えるばしよにある。

教室に入って自分の席を探す。机の並びは縦横六列で、黒板の方を見る形で、右から二番、前から三番目の場所に机があつた。ちなみに出席番号は二十七。自分の席について時間が経つのを待つ。周りの人は既に友達を作り話したりしているが、俺にはそんなこと関係ない。話してくる奴は話してくるでいいし、無視する奴は無視すればいい。こつちの本当の姿を認めて、間違つたらそれを正してくれる。それが本当の友達だと思っている。上辺だけの関係なんて俺はいらないから。

・・・ガララッ

教室のドアが開く音がすると、今まで話していた生徒がそれぞれの席につく。

教室に入ってきたのは教師らしき人で、髪の色は黒、瞳は緑で、普通の大人より少し細かつた。

「みんないるな。・・・よし、今から体育館に移動する。出席番号順に廊下に並べ」

特に特徴のない声で生徒達に指示をだす教師。

生徒達はダラダラと廊下に並び、教師の指示どおり体育館へ移動する。

「よし、止まれー」

教師号令で体育館の入口から数メートル離れたところで止まる。

「入場の号令がかかるまで、ここで待機しとくように。お前達はB

組だから二番目だぞ、間違えるな」

そういうと教師は体育館の中に入っていった。俺達の組が体育館に着いた時は、C組とE組がいて、俺達に着いた少し後にA組とD組が来た。全部の組が揃って少したったら、体育館入場の号令がかかった。体育館の中に入ると、既に二・三年生は椅子に座っていて、座り方は前から入学生、三年生、二年生の順に並び、真ん中辺りに人が通れるように間が開いていた。入学生は、その真ん中の道を通って自分達の座る場所へと移動する。一クラス全員がそれぞれの椅子の前に着いたら、放送の号令で次々に座っていく。全員が座り、静間に反ったところに始まりの挨拶が始まった。

『これから入学式を始めます。一同起立。礼。一同着席してください』

『入学生歓迎。生徒会長お願いします』

(式つてめんどくせえ〜なあ〜)

少し俯き眠りの体勢をとる。

「新一年生の皆さん、入学おめでとうございます。私は・・・」

(ん？どっかで聞いたことある声だな・・・。まあ、いいか)

そこからのことは記憶にない。入学式が終わり、退場する寸前まで寝ていたからだ。

入学式が終わって自分達の教室に戻って来た。今はHRホームルームの最中。

自己紹介を順番にやるらしい。最初に担任の教師が自己紹介をした。担任は、入学式が始まる前に呼びに来た教師で、名前は緑化翠じょくかみどり、年齢二八、独身らしい。

「よし、先生も自己紹介したんだから、お前らも出席番号順に自己紹介していけ」

出席番号一番の女子が声を出して立ち上がり自己紹介をはじめた。「はい、私の名前は相坂日登美です。趣味は読書です。よろしくお願ひします」

自己紹介が終わって座ると入れ換えに、後ろの席の人が立ち上

がり自己紹介が始める。そんな自己紹介を全員分聞くわけがなく、自分の首に掛けてある宝石を見つめる。

（俺、本当にあの家から出てきたんだな）

この宝石はお父さんの形見としてお付きのメイドに渡された宝石。実は妹も似たような宝石を持っている。形は変わらないが、色は赤色で、妹の宝石はお母さんの形見らしい。お母さんは妹が産んですぐに亡くなったらしい。なので、俺はお母さんの顔を覚えていない。当然産まれたばかりの妹も覚えてはいるはずもない。だけど俺は、何故か物心ついた頃からお母さんが亡くなった事に対して、ひどい罪悪感を持っていた。屋敷の色々な人に聞いてみたが、その理由はわからなかった。

「私の名前は秋月靈霞です」

その言葉で我にかえる。

（秋月？・・・確か昨日行った神社もそんな名前だったような）

その言葉を言った人を見ると、茶色い髪で、髪を左右束ねてゴムでとめてある。その髪形には見覚えがある。そう、昨日神社の桜の木の下にいた少女だった。「おい、次。おい、出席番号二十七番」

教師の呼び声に我に反る。

「あ、はい」

「次の自己紹介はお前だ」

「あ、すいません」

謝りながら立ち上がり自己紹介を始める。

「俺の名前は風舞鬪留。趣味は、・・・剣術・・・です」

紹介が終わるとすぐに座る。座ると同時に後ろの人が立ち上がり自己紹介を始める。そうやって、一通り全員自己紹介が終わった。

というか、結局HRは自己紹介だけで終わってしまった。

「じゃあHRはこれで終了します。SHRはすぐやるから。教室からは出ないようにしろよ」

そういうと、翠はさっさと出てってしまった。教師が出ていくと、生徒たちは一斉に自分達の友達等と話し始めた。俺の前の席の男子

も俺に話しかけてきた。少し髪を立て、悪びっている感じがある。

「ようっ、鬪留でよかったっけ？」

見た目通りで、気さくに話しかけてきた。

「ああ。お前はなんて名前だったっけ？」

「いや、お前。名前くらい聞いといてくれよ」

「悪い、自己紹介の時ばーっとしてた」

「ははっ、確かにお前、先生に呼ばれた時も少しの間反応なかったからな。俺の名前だが、俺の名前は日原光次ひはらみつぐよろしくな、風舞鬪留」  
そういうと、光次が右手を差し出してきた。

「ああ、こちらこそよろしく、日原光次」

そして、光次の差し出された右手を握り返した。

「なあ光次、秋月霊霞って、秋月神社の巫女の秋月霊霞だよな？」

「そうだよ。てか、他にそんな独特な苗字ねえーだろ。」

「まあ、でも俺の風舞って苗字も独特だけだな」

「まあな。で、その秋月神社の巫女さんがどうしたって？」

「いや、昨日会ったんだよ。まさか同じ年とは思わなかったから確かめたんだけど」

「気になるんだろ？」

「は？」

「わかるよ。秋月可愛いもんな。今年の新生ベスト十に入ってるぐらいだから」

「あ、そう。ていうか、いつ調べたんだよ」

「今年は女子のレベル高いらしいからなあ。一回上位ランクの人と付き合ってみたいぜ」

「無視か」

「・・・何が上位の女子と付き合ってみたいよ」

「えっ!?!」

突然の話しの割り込みに二人して驚く。そして光次は固まった。

そこに立っていたのは両手を腰に当て、仁王立ちしているシヨート

ヘアの少女、出席番号一番、相坂日登美がいた。

「まったく、入学式早々女の子ばかり追いかけ回す男が何処にいるのよ」

「日登美？まさかの嫉妬か？はあくモテる男は辛いねえ」

ドコオ・・・ドコオ・・・ドコオ

「死んで反省しな」

そう言い残すと相坂は自分の席に戻っていった。

「・・・自業自得だな。光次」

「それでも右手で顔面グーはねえーよ」

「どんまい。それはそうと、お前相坂とどういう関係なんだ？」

「同じ夜を過ごした仲さ」

・・・ガシャン

何故か俺の机の上に、さつきまではなかったはずの、二本の刃をもつ、よく切れる物があった。

「冗談だ。・・・まあ、あながち間違いではないけどな」

この空気を打ち破るかの用に翠が教室に入ってきた。

「よし、帰りのSHR始めるぞ。みんな席につけ」

翠の指示でみんな席につき帰りのSHRの準備をする。

「よし、みんな座つたな。それじゃ、帰りのHRを始めるぞ。明日はテストがあるから忘れるなよ」

教室全体からブーイングの音が飛び交う。しかし、それにも動じず喋り続ける翠。

「それから、テストが終わった後に席替えもするからな。いいか、くれぐれもテストでは不正はするなよ。以上。これでSHR終了。挨拶はいいから、もう解散してもいいぞ」

そういうと翠は教室を出ていった。教室では生徒たちが帰り支度をする様子や、教室に残って友達とだべる様子が見られた。

「明日はテストか、嫌いなんだよな」

光次が愚痴をこぼす。

「確かにめんどくせえけど、あるもんはあるんだからしょうがね

えーじゃねーか」

「それはそうだけど、自信ねえーんだよ俺。鬪留、お前は自信あんのかよ」

「まあ、普通かな」

「確かにあるもんはあるんだからしゃあねえーな。じゃあ、俺は用事があるから。また明日な鬪留」

「明日」

（俺も帰るかな）

鞆を持ち、教室を出ようとしたとき校内放送がながれた。

ピンポンパンポン・・・

『購買部からの連絡です。今日から購買の販売があります。購買は一階、正面玄関の左にあります。ぜひ皆さん来て下さい』

ピンポンパンポン・・・

（購買か、行ってみよっかな）

さっきの放送で聞いた通りに購買に来てみたが、放課後のせいか、生徒たちはほとんどいなかった。買っている人は、生徒三人、先生らしき人が五人だった。その団体の後ろに回り自分の番が来るのを待つ。

以外に進むペースは早く、あっという間に俺の番が来た。

「ホントに来てくれたんですね」

話し掛けてきた人の声は購買の中から聞こえて来た。そこにいた人は朝、マンションとクラスの張り出しの時に会った先輩だった。

「少し気になったんで・・・」

「私のこと？」

「購買です」

「残念・・・」

「そんなことよりも、なんか売って下さいよ。先輩」

「そうね。これなんてどうかしら？」

先輩は一つパンを手に取り、見せてくれた。ぱっと見あんパンに

しか見えない丸っこいパンだった。

「このパン、一見普通のアンプルンに見えるかもしれないけど、中は苺ジャムが入っているの」

「へー、他にはいいパンはないんですか？」

「それじゃあ、こつちのアンプルンに見せかけたメロンジャムパンは？」

「ほかには？」

「なら、アンプルンに見せかけたりんごジャムパン」

「他に」

「アンプルンに見せかけたアンプルン……」

「最終的にアンプルン！ てか、見た目全部一緒じゃないですか！  
なんで先輩中身わかるんですか!？」

「長年購買部をやっていると、中身が手にとるようにわかるのよ」

「先輩、購買部に入ると超人になれるんですか？」

「いいえ、これは購買部の部長だけ使える能力なのです」

「すいません。なんかもうつつこむ気おきないんで、普通に売って  
もらえますか？」

「しょうがないわね。最後に、このアンプルンに見せかけたコインマ  
ヨパン！」

「最初っから、そういうパン勧めてもらえませんか」

「でも、私的にはこのパンが一番の駄作なのよ」

「先輩の好みは普通の人とズレてますよ！」

「でも、私が『この前のパンどうだった?』って笑って聞くと、『  
美味しかったです!』ってみんな言ってくれるわよ」

「お、恐ろしい人だ……。そ、そんなことより、その、コインマ  
ヨパンっていくらなんですか？」

「百二十円です」

俺は自分のポケットから財布を取り出し、小銭入れから百二十円  
を出す。そして無言のままそのお金を渡し、パンを受け取る。

「ありがとうございます。またいらしてください！」

(もう絶対に行きたくねえ)

俺は今買ったパンを頬張りながらそう心に誓った。

「待てっ！」

「んがっ？」

俺の目の前には身長百八十くらいのドデカイ男教師が立っていた。

「廊下で食べながら歩くな！」

「すいません先生。でも食べながら歩いてる人なら他にもいますよ。ほら、あっちにもこっちにも」

誰もいない適当な方を指差す。

「人のことより、まず自分のことだ！」

「次からは気おつけます。ではっ」

そういつて、先生の脇を通り過ぎようとする。

「待てっ！」

しかし、普通に通してくれるはずもなかった。

「何ですか？」

「その首に掛けている物は何だ？」

「見ての通りアクセサリーですよ」

「そんなことはわかってる。なぜこんな物を学校に持って来ているのかと言っているんだ！ はずせっ！」

先生がそういつて俺の首飾りに向かって手を伸ばしてきた。俺はその手を素早く掴んだ。

「これは俺の大事な物なんだ。汚い手で触んじゃねー」

「くっ。俺を誰だと思ってる。生徒指導部の石田だぞ」

「知らねえーよ」

石田の手を離し、再びパンを頬張りながら正面玄関に向かう。そのあと石田は追っては来なかった。

下校途中、また秋月神社の看板が目についた。またあの長い坂と階段を登ろうとしている自分がある。それくらいこの神社の桜は綺麗だった。

神社の階段を登りきり桜の傍まで行く。昨日と同じで幻想的な気分させてくれる。桜の木の向こう側、神社の脇に巫女衣装の秋月が竹箒で掃除しているのが見えた。こちらに気がついた秋月は掃除を止め、話し掛けてきた。

「あ、鬪留くん。また来てくれたんだ」

「まあ、この桜の木をもう一度見たくなったんで。そういえば秋月って同い年だったんだな」

「うん、私もびっくりしたよ。まさか同い年だったなんて。あつ、それから私のことは霊霞でいいよ。秋月って呼ばれるの、あんまり好きじゃないの」

「わかった。じゃあ、俺のこと鬪留って呼んでくれ」

「うん」

「・・・ねえ、鬪留。今日の翠先生を見て、何か気になることってあった？」

「えっ、そーだな。普通の男性より少し細く感じたことと、瞳の色が緑色をしたことかな」

その時、霊霞は少し驚いた顔になりすぐにその表情を隠した。

「ん、どうしたんだ霊霞」

「う、ううん。何でもないよ」

何でもないので、霊霞の言葉は明らかに動揺していた。

「ねえ、じゃあこの桜、何か普通の桜と違うのってわかる？」

「えっ、まあ確かに何かオーラみたいなの纏ってるの見えるけど・

・・・

「やっぱり。でも・・・ブツブツ・・・」

何か霊霞は一人でブツブツ呟いて、自分の世界に入ってしまった。

「なあ・・・」

「ブツブツ・・・ブツブツ・・・」

「おーい」

「ブツブツ・・・」

「おい！」

「ブツブツ……。あつ、ごめん。つい自分の世界に入っちゃった」  
「別にいいけど、ひとつ聞きたいことがあるんだ」  
「何？」

「この桜って、なんで光ってるんだ？」

「……。あなたのがわかったら、この桜のこと教えてあげてもいいよ」

「俺のこと？」

「うん、そのうちわかると思うから。それよりも、私はあなたが首に掛けているアクセサリーの方が気になるけど」

そう俺の首飾りを指差し言ってきた。

「ああ、これは俺がこっちに来る時に渡されたものだ。お父さんの形見だそうだ」

「ってことは、鬪留のお父さんもう亡くなってること」

「ちなみにお母さんもいねえーよ」

「ゴメン。変なこと聞いちゃったね」

「いや……」

「実は私のお母さんとお父さんも昔に死んじゃってね。それからはお爺ちゃんと二人で住んでるの……」

「そうか……。俺はこっちに越して来る前、ろくなことなかったからな。昔のことは思い出したくもない」

「でも、楽しいことの一つや二つはあつたんじゃないの？」

「……。それでも、な」

「……。ねえ」

「ん？」

「私、掃除が終わったら商店街に買い物に行くの。よかったら一緒に行かない？」

「別にこの後に用事はないからいいけど……」

「じゃあ、もう少し待っててね」

そういうと、さっきまで掃除していた場所に戻っていった。俺は神社の階段に座り、町の風景を見ながらぼーっと霊霞が終わるの

を待った。

数分後・・・

掃除が終わった霊霞がこちらに近づいて来た。

「お待たせ！」

「・・・お前、その格好のまま行くのか？」

そう霊霞の巫女装指差し言う。

「やっぱり着替えて来た方がいいかな？」

「その格好だと目立つだろ。少し恥ずかしいかなあ〜って」

「別に気にしなくてもいいと思うけど。鬪留が嫌なら着替えて来るよ。ならもう少し待っててね」

そういうと、霊霞は神社の裏にパタパタと走って行った。

「ふう〜」

「ついに戻って来てしまったのね」

「えっ！」

気付かなかった。振り返ると、いつの間にか俺の後ろには、一人の少女が立っていた。その少女は昨日商店街で話しかけて来た、水色髪の少女。しかし、昨日の少女とは明らかに声のトーンが違っていた。

「お前は・・・誰だ？」

「私はクランセス。私のことはどうでもいいわ。それより鬪留、あなたが戻って来たことによって、色々なものが目覚めてしまった。

どんなことがあっても、逃げないことね。というか、逃げれないわ」

「何があるんだよ・・・」

「そのうちわかるわ」

「何で俺なんだよ！ 俺、こんなところに来た記憶なんてねえーぞ！」

「あなたは知っているはず、この桜の木を・・・」

「?.....」

考えながら腕を組み俯いていると、靈霞の駆け寄ってくるのがわかった。顔上げると、そこには既に克蘭セスと名乗った少女の姿はなかった。

「どうしたの、鬪留？」

「今ここに女の子見なかったか？」

「えっ？ 別に誰も見なかったけど・・・」

「そうか、ならいい。じゃあ行くか」

「うん」

神社から少し歩くと、商店街が見えて来た。相変わらず、すごい人込みだった。靈霞はその人込みの中をスルスルと抜けていくが、俺はその靈霞を追いかけるので精一杯だった。所々の店で、靈霞が止まって買い物をしているのを見て、渡される荷物を無言で受け取る。靈霞は「いいよ」と言ったが、俺は首を振って「俺が持つ」と訴えた。靈霞は少し怪訝そうな顔して次の店に行った。噴水の辺りまで行くと人も疎らになり、荷物を持っていても割と楽になった。その噴水の近くに見たことのある顔があった。その人に靈霞が気付くと、名前を呼びながら駆け寄っていった。当然俺は走れないため、靈霞の走った後を歩いてついていった。

「日登美、何でこんなところにいるの？」

「ある人と待ち合わせ」。靈霞こそ、こんなところで鬪留くんと何してるの？」

「ちよつと買い物に付き合ってもらってるの」

「へー・・・ねえ鬪留君、今日学校どうだった？ あんな変なのに絡まれて、鬪留君も大変だね」

「光次のことか？ いや、あいついい奴だよ。こつちまで気分をよくしてくれる」

「ふーん。あいつが褒められるとは思わなかった」

「光次って、そんなにひどい奴なのか？」

「うーん。ある意味、ひどいかな。近いうちにわかると思うよ」

「なんか日登美って、光次のことすごく変なふうに言うよね。どうして？」

「べ、別に、そんなことないよ。霊霞の気のせいだよ」

「私の気のせいか……。それならそれでいいけど。じゃあ、私たちそろそろ行くわ。鬪留も荷物重そうだし」

「そう、じゃあまた明日ね、二人とも」

「うん、じゃあね」

「ああ、また明日」

俺達は相坂と別れ再び買い物に戻る。

(って、まだ買い物するのかよ)

「ゴメンね、鬪留。家ってあんな高いところに建ててあるじゃない。だからいつも一週間分の買い物するの」

「えっ、俺何も言ってるねえーぞ」

「ん、何が？」

「あ、いや、別に、何でもない。そ、そっか、霊霞も大変なんだなあー」

「まあ、もう慣れたけどね。あと今日は鬪留が手伝ってくれてるし。

あ、そうだ！ 今日手伝ってくれたお礼に、何かおごってあげる」

「いや、これくらいどうってことないよ」

「人の好意は受け取りなさい」

「んー。特に欲しいのはないから、霊霞適当に選んでくれ」

「それじゃあ」

そういつて、霊霞が向かった場所は、駄菓子屋だった。霊霞は俺に外で待っているように言って、中に入っていった。数分もたたないうちに霊霞は買い物済ませ、駄菓子屋の中から出てきた。その右手には、長方形の金色の箱を持っていて、その箱を俺の前に差し出してきた。

「はい、今日はありがとう」

「ああ、それでこれ・・・何？」

「そこに書いてあるでしょ。アーモンドチョコレートって」 確か

に、金色の箱には英語でALMOND CHOCOLATEと書いてある。

「もしかして、鬪留。これ食べたことないの？」

「・・・ないな」

「食べてみて、美味しいよ」

箱はカゴ状の箱を筒状の箱で包んだスライド式になっていて、中の箱を少しずらすと、中には一口サイズのチョコが沢山入っていた。その中の一つだけチョコを取り出し、その取り出したチョコを口の中に入れる。口の中に入れると、チョコの甘さが徐々に口全体に広がってくる。その絶妙な甘さが病み付きになる。

「うまいな。ありがとう、霊霞」

「どういたしまして。・・・それじゃあ、そろそろ帰ろっか」

「ああ」

俺はチョコの箱を、ブレザーのポケットに入れて、商店街の人込みを抜けてく霊霞の後に続いた。

俺達がいよいよ物を済ませ、神社に戻る頃には既に日が暮れていて、桜の木の光がより際立って見えた。

「すっかり遅くなっちゃったな」

「ゴメンね、こんな遅くまで付き合わせて・・・でも、今日は楽しかった。ありがとうね」

「荷物持ちでも何でも、俺でいいなら手伝っせ」

「それじゃ、また頼むね」

「ああ、頼まれるよ。・・・それじゃ俺、そろそろ帰るわ」

俺は霊霞に別れを告げ、神社の階段を下りていく。

鬪留と別れた後、霊霞は神社の前に立っていた。そして霊霞の後ろには、身長の高い白髪のお爺さんが立っていた。霊霞はそのお爺さんに話しかける。

「お爺ちゃん、言いたいことはわかるけど、もうそろそろ来る頃だ

から」

白髪のお爺さんが口を開く。

「いや、特に何か言いたい事はない。しかし、お前を任せられるかどうかは、わしが決める。そのこと、しっかり覚えておくことじゃ」  
それだけ言うと、お爺さんは神社の裏手へと消えて行った。

「うん……。わかつてる」

霊霞はお爺さんに聞こえない声で呟く。その瞬間、茂みから音が聞こえた。

「さあ来い、化け物！」

霊霞はポケットからお札を一枚取り出し、そのお札を一瞬で弓の形へと変えた。そして弓を構え、茂みから何かが飛び出すのを待つ。茂みからの音が消えたと思ったその時、その何かがこの世の物とは思えない叫び声をあげ飛び出て来た。

神社の階段を下り終えた時、さっきまでいた神社から、この世の物とは思えない叫び声が聞こえてきた。

最初は空耳だと思ったが、俺はその声が気になり、今下りてきた階段を勢いよく駆け上がる。そして階段を上るにつれ、空耳だと思っていた叫び声はつきりと聞こえて来るようになった。階段を上り終えると、そこには灰色をした大きな丸い物体が浮いていた。正確に言えば、その丸い物体に、小さな悪魔の羽のような物がついていて、物体のど真ん中に大きな一つ目がついた物体。それを表現する言葉は、まさに化け物だった。

その化け物の向こう側に、今すぐにも放ちそうなくらい弓を引いた、霊霞の姿があった。

「霊霞！」

思わず叫んだ俺の声に、霊霞だけでなく、化け物まで気付いてしまった。

こちらに気付いた霊霞は弓を引くのを止め、俺に逃げるように指示をだす。しかし、同じくこちらに気付いた化け物が、俺が逃げ出

すよりも早くこちらに突っ込んで来た。

もうダメかと思ったとき、自分の首に掛けていた宝石が光、その形を剣へと変化させた。俺は頭で考えるよりも早くその剣を取り、突進してくる怪物を剣で受け止めた。受け止めた。そう、その剣では、怪物を斬ることは出来なかった。怪物の突進を受け止める形で身動きがとれなかったが、一本の光の矢が怪物を貫くことにより、その問題は解決された。矢が貫通した怪物は、蒸発するように俺の目の前から消えた。

「助かったのか？」

安堵している俺に、弓を札に戻した霊霞が近づき、話しかけてきた。

「そんな弱い力で来てもらってもじゃまなだけ、もう二度と戦いに来ないで」

そういつて霊霞は、俺に背を向け去っていく。

「霊霞！」

震える唇を噛み締め、今出せる最大の声を出し霊霞を呼び止める。少し歩いた所で霊霞は止まり、背中越しに言ってきた。

「大丈夫。明日からは、さっきまでの関係と一緒だから」

霊霞はそういつと、こちらに振り向き話しを続けた。

「それから、今あったことは忘れて。あなたは、私が探してる人じゃないかった・・・」

そういつた霊霞の顔は、とても悲しそうな顔をしていた。それ以上話したくなかったのか、霊霞はそれだけ言いつと神社の裏へ走り去っていつた。

その後、家に帰つた俺は、ベットに入ったものの、今日夜あつたことと、霊霞の悲しそうな顔が頭から離れず、なかなか寝付けなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9554i/>

---

天使降臨-英雄から伝説へ-

2010年10月17日01時53分発行